

## 松尾兄弟のことなど

江 口 修

1960年代後半、いわゆるベトナム反戦から大学紛争の時代に高校、大学を過ごした世代にとってパリあるいはフランスとはどのように映っていたのだろうか。この世代で現在もっともフランスを描いて、フランスを体験したものにも、いまだ知らぬものにも、静謐な情景とその背後にある沈潜したしかし熱い歴史との一瞬の交錯を描いて「ああ、ここだ」と唸らせる作品を発表し続ける作家に藤田宜永がいる。その『巴里からの遺言』（文春文庫版）の解説で、これもバルザック研究家にして巴里の近代化を深く探求してモダニズムの源泉を活写し続ける鹿島茂は次のように述べている。

1998年現在、大学のフランス文学科はもっとも不人気な学科の一つで、第二外国語のフランス語履修者も激減している。女性誌はそれでもパリ特集を組むが、売れ行きは以前ほどではないという。この世紀末において、日本人にとって、パリもフランスもかつてもっていたような魅力を失ったかのように見える。

だが、1970年代はちがった。パリは、本当に輝いていた。男も女も、とりわけ、文学や芸術に入れあげた文科系の男たちはパリに強く強く惹きつけられていた。ヌーヴォー・ロマンはまだ元気で、構造主義が時代の脚光を浴び、映画でもヌヴェル・ヴァーグが新作を送り出していた。全共闘の大きなうねりが1972年の連合赤軍事件で完全に終焉してしまった日本のくすんだ日常から眺めると、パリはまぶしくて目を開けていられないくらいの輝きを放っていた。（下線筆者）

たしかに、70年代の「無目的なパリ行き」の熱病のような蔓延を知っている同時代人にとっては悲しくも懐かしい回顧ではある。しかし、鹿島はパリ熱の歴史というべきものを紐解いてみせる。昭和の初頭十年にわたって見られたフランス渡航のブームである。第一次大戦の便乗景気で思いがけず金持ちになった日本から多くのそしてさまざまな種類の人たちが一月の船旅で次から次へとパリを目指して横浜から旅立ち、そして帰国してきた。パリには日本人のネットワークというべきものが作られ、特に貧乏画家たちが好んで集まったダゲール通りはすでに有名になりつつあった。モンパルナスにも近く、気の置けない下町であったダゲール通りはなによりも魚屋が多く日本人にとってはありがたい街であった。鹿島はこの時期の「無目的なパリ行き」を代表する人物たちとして「戦後のラジオ番組、『とんち教室』やテレビ番組『私の秘密』などで活躍した1900年前後に生まれたモボ・モガ世代」の石黒敬七、渡辺紳一郎そして松尾邦之助を挙げているが、この松尾邦之助こそ実は、本学でというか第二次世界大戦をはさんで長く北海道のフランス語教育を支えられた松尾正路先生の実兄にあたる人物なのだ。筆者は生前一度だけ松尾正路先生から「私の兄で新聞記者をやっているのがいたんですが……」とお聞きしたことがあるが、そのときはさして気にも留めずにいた。だが、鹿島茂の跋文にその名前が再登場してきたとき、また荷風の『フランス物語』、藤村の『エトランゼ』そして横光利一の『旅愁』と戦前の滞仏記ともい

うべき系譜をたどり読み直し、改造社版全集第十六巻『旅愁』(一)に、

丁度云い合わせたようにその家のすぐ横の本屋の店頭高く、松尾邦之助訳の芭蕉の句集が積んであった。

「君、二百年も経つと、芭蕉もこんな所へ出るんだね。」

と東野はこれには感動した様子でその句集を手にとって眺めていた。(396頁)

とある。さっそくフランス国立図書館の検索システムで探して見た。あった。*Haïku de Bashô et de ses disciples*, Traduction de Kuni Matsuo et Steinilber-Oberlin とある。しかも挿絵は藤田嗣治。発行は1936年であるから、まさに横光が渡欧した年である。そしてこの年6月にはフランス人民戦線内閣が成立し、大資本と対峙した年である。横光は短い滞在ながら、ヨーロッパの混乱を鋭く感じ取っており、『旅愁』のフランスを舞台にした部分は読み応えがある。さて、松尾邦之助が訳してかの地で評判をとったその他の日本文学にはジョルジュ・クレス社 (éditions G. Crès) から刊行した『其角の俳諧』*Les Haï Kai de Kikakou*、や清少納言の『枕の草紙』*Les Notes de l'oreiller*, Stock 社 (1928)、倉田百三の『出家とその弟子』*Le Prêtre et ses disciples*, Rieder 社 (1932) などがある。

松尾兄弟についてまとめておこう。邦之助は明治32(1899年)年11月15日静岡県引佐町(イナサと読む)金指生まれ、正路は明治38年(1905年)1月7日同地生。6つ違いである。遠州森の近くといった方が分かり易い方もいらっしゃるだろう。兄邦之助は大正11年に東京外国語学校フランス語部を卒業、弟正路も同じフランス語部を大正14年に卒業している。東京外語の卒年では3年しか違わない。邦之助は卒業と同時に逓信省に入るが、すぐに渡仏する。「大正十一年の暮れの日曜日に諏訪丸の二等船客だった私は初めてフランスの土を踏んだ」(『フランス放浪記』)、出発は同年十月十二日であるから、四十日余の船旅であった。同室したのは東京高等師範学校教授神保格。このとき、上司の課長のはからいで逓信省無給嘱託の辞令を貰っている。正路は卒業後2年して第一外国語学校仏語講師になり、2年後の昭和4年(1929年)小樽高等商業学校仏語講師を嘱託され同年7月に助教授に任ぜられている。そして昭和12年(1937年)にフランスへの出張を命じられる。つまり横光の渡欧の一年後ということになる。翌年の5月2日帰朝となっているので、正路の滞仏は1年強である。正路の随筆集『地球の春』によれば、行きはシベリヤ経由の鉄路、三等客室の旅人となった。ベルリンを目指した山田耕筈が一等客室にいた。フランス人民戦線内閣、スペイン内乱、ヒトラーのナチス・ドイツと時代はまさに風雲急を告げていた。国境の通関で「どういうわけかパリへ行く日本の学校の先生である私はほかの人たちより寛大に扱われ、ベルリン行きの日本人は、山田耕筈氏をはじめ、みんな厳しく調べられる」(同書、「シベリア通過記」)のもむべなるかな。そして帰りはマルセイユからの欧州航路である。ただし「十二月のナポリは五月の伊豆だ」(同上、「パリ脱出」)は脚色であろう。帰朝は1938年5月2日である。『旅愁』の主人公の一人矢代の旅程の逆である。そしてパリでの滞在先ははっきりとしないが、兄邦之助はこの頃はパリ15区のラカナル通り (rue Lakanal) のアパートマンに住んでいた。また、邦之助の言う中西頭政にポンと出資してもらって作った雑誌『日仏評論』*Revue franco-nipponne*の事務局兼印刷所が13区と14区の境であるアミラル・ムシェ通り22番地 (rue l'Amiral Mouche) にあった。歩くと結構離れているが、モンパルナスをはさんだこの間のどこかに正路は住んだと思われる。

ここまで確かめて『地球の春』中の「イヴォンヌ パリの憂鬱」を読み返すと、正路のパリ時代がまざまざと蘇ってくる。イヴォンヌとは誰だろう、武林夢想庵とその妻文子との間にできた子供である。この夫婦についてはさらにしか正路は触れていないが、邦之助がパリでもっとも関わりを持った人間の一人である。東京帝国大学卒でドーデの『サフォー』翻訳で一世を風靡し、時代の寵児としてパリにやってきた夢想庵は、邦之助にとって日本式インテリのいやらしさをことごとく備えた人物だったようだ。が結局は帰国までいろいろと面倒を見ている。その才能には一目置いていたのだろう。妻の文子は「妖婦」あるいは「ファム・ファタル」としてスキヤングルを次々と引き起こし、夢想庵を「コキュ」にし、そのおかげでこのフランス語は日本語になりかけた。イヴォンヌにいろいろ振り回される正路だが、イヴォンヌという娘は「パリ」の暗喩とも見える。そして、誰だろうこのイヴォンヌ嬢こそ、邦之助がもっとも影響を受けたとも言えるアナキスト辻潤と伊藤野江との間に生まれた辻まことの最初の妻となる。「ボクは子供の時から兄キにぶんなぐられて育った。兄キに叩かれても叩き返すことができなかった」（同上）正路はこのパリ滞在で、殴られながらも後を追いかけてきた父や兄から自立するようだ。貧しいながらもすんなりとパリに溶け込んでいった邦之助も、正路渡仏のころはすでに読売新聞の正記者になっており、パリ日本人社会のフットワークのよい幹事役として活躍していた。その付き合いのよさ、たとえば藤田やその他怪物のような芸術家たちと夜のパリを遊びまわった武勇伝は、一部では蟹壺を買っている。そして邦之助の友としてよき理解者、彼なくしてはパリ定住も叶わなかったかも知れないフランス人、オーベルラン氏のことまた忘れてはならないだろう。氏はフランスの内閣の大臣官房長まで務めながら、さっさと政界から身を引き、資産をうまく運用しつつ、東洋研究にいそしみ特に日本の仏教および仏教美術に深い造詣を持った。

スタィニルベル・オーベルラン 私の一生を通じての唯一無二の親友であったオーベルランは、ささやか乍ら真剣につづけた日本文化紹介の仕事の私の右腕役を務めてくれた恩人である。彼はストラスブール市の名門の出で、(中略)若かった頃前文相ド・モンドや前商相ボカノフスキーの学友で、一時、有名なジャン・ジョレスの秘書をしたこともあり、(中略)ヨーロッパ第一次世界大戦のむごたらしさを目撃してからふと無常を觀じた彼は、キリスト教文明にあきたらずサンスクリットの研究をつづけつゝ佛教に誘惑され、特に日本の思想文芸に興味を感じた。(『フランス放浪記』、p.213) (ルビ原著者)

正路はなぜか偶然オーベルランとアントワープで会うのだが、それはイヴォンヌの監視役として文子に頼まれアントワープに同行しその海水浴場で、例のごとくイヴォンヌのむら気に振り回され、やむなく遊泳禁止地区を泳いで渡ったときのことである。オーベルラン氏は母と妹をアントワープに移住させパリとの二重生活を送っていたのだ。正路も氏には大いに好意を抱いていることがその描写からも窺える。だが正路帰朝後ヨーロッパは第二次世界大戦へと一気に進んでゆく。邦之助も戦争勃発とともに帰朝する手はずであったが、失敗しその後トルコのイスタンブールやマドリッドを経て、戦後、昭和21年3月27日に久里浜着の便船で帰朝している。

戦後は読売の論説委員として活躍。フランス紹介の著作を多く出している。しかし戦後の兄弟はお互いに言及することほとんどない。しかし、1937年という人民戦線内閣下のフランスを知る二人は、世界のあるいはフランスの転換を身をもって体験した兄弟であった。「日本帝国主義くたばれ！」と道行く者から罵倒されつつも、パリの息吹を、われわれの知らないパリを知っていた

二人なのである。鹿島は「日本人にとってのパリ体験は、臨死体験に似ている。向こうに行ってしまった人は記録を残さず、帰還した人の証言は信憑性に欠ける。だが、なかには、よくぞ帰還できたと思わせるような迫真の臨死体験もある」(同上、p.329)と言うが、われわれは藤村のベルエポック最後の古き良きパリから横光の人民戦線登場で死を予感させる混乱のパリそして大戦へと向かうこの時代について松尾兄弟の特に邦之助の残した証言を参考に再構成して見るのもよいかも知れない。

さて、小樽商科大学付属図書館には松尾邦之助の著作は残念ながら4冊しか所蔵されていない、翻訳が二点と『巴里素描』と『巴里』の二冊である。『巴里素描』は背が壊れていて応急修理のままになっているのだが、この中には数少ない弟正路への言及がある「小樽でフランス語の教師をしている弟がいるのだが……」なんとここに誰かが鉛筆で書き込みをしている。弟から線を引っ張ってその先に「松尾先生？」とある。もうとっくに時効なので、この文章を目にした心当たりのある方は是非情報提供していただきたいのだが、ご存命かどうかもう危うい。そして『素描』の最後に小説ともつかない物語があるのだが、その筋のあらまは、真知子という日本人女性がパリで危地に陥るのだが、彼女を慕う日本人男性が救い出すという話しである。さて真知子とは横光『旅愁』の女主人公の名ではなかったか。